

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察予報について（送付）

このことについて、令和8年度（2026年度）病虫害発生予察予報第5号を発表しましたので送付します。

予 報

令和8年度（2026年度）病虫害発生予察予報第5号（8月予報）

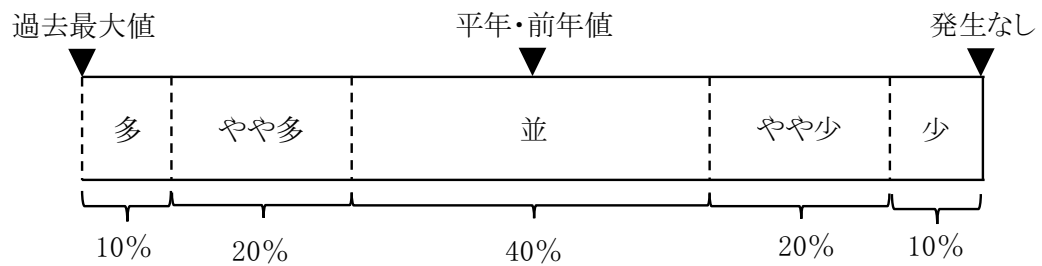
作物	病虫害名	7月の発生状況		8月の発生予想	
		平年比		平年比	前年比
水稻	いもち病 (穂いもち)	早植え	並	早植え	並
	いもち病 (葉いもち)	普通期	並	普通期	並
	紋枯病	早植え・ 普通期	並	早植え・ 普通期	やや多
	トビイロウンカ	早植え・ 普通期	並	早植え・ 普通期	並
	コブノメイガ	早植え・ 普通期	やや多	早植え・ 普通期	やや多
	斑点米カメムシ類	早植え・ 普通期	並	早植え・ 普通期	並
大豆	ハスモンヨトウ		並	並	並
茶	炭疽病		やや少	並	やや多
	カンザワハダニ		並	並	やや少
	チャノキイロ アザミウマ		並	並	並
	チャノミドリ ヒメヨコバイ		並	並	並
	チャノホソガ		並	並	やや多
	チャノコカクモン ハマキ		やや少	やや少	並

作物	病害虫名	7月の発生状況		8月の発生予想	
		平年比		平年比	前年比
かんきつ	黒点病	並		やや少	やや少
	かいよう病	並		並	やや少
	ミカンハダニ	並		並	並
	チャノキイロ アザミウマ	並		並	並
なし	ハダニ類	並		並	やや多
	ナシヒメシンクイ	やや多		やや多	並
果樹全般	果樹カメムシ類	多		多	多
トマト	灰色かび病	夏秋作	多	夏秋作 やや多	多
	葉かび病	夏秋作	並	夏秋作 並	やや多
	すすかび病	夏秋作	並	夏秋作 並	やや多
	うどんこ病	夏秋作	やや少	夏秋作 やや少	並
いちご	炭疽病	育苗ほ	並	育苗ほ 並	並
	ハダニ類	育苗ほ	やや多	育苗ほ やや多	多
	アブラムシ類	育苗ほ	並	育苗ほ 並	多
果菜類 (高冷地)	コナジラミ類	夏秋作	並	夏秋作 やや多	並
果菜類 (平坦地)	コナジラミ類	夏秋作	並	夏秋作 やや多	並
	アザミウマ類 (いちご除く)	夏秋作	並	夏秋作 やや多	並
野菜類全般	オオタバコガ	並		並	並

Ⅱ その他の病害虫の発生予想概要

部門	8月の発生予想	(作物) 病害虫名
	平年比	
普通作	並	(早植え・普通期水稻) セジロウンカ、ヒメトビウンカ、ツマグロヨコバイ
野菜類	並	(なす(平坦地)) 灰色かび病、すすかび病 (きゅうり(平坦地)) ベと病、うどんこ病 (キャベツ(高冷地)) 黒腐病 (いちご) うどんこ病 (全般) ハスモンヨトウ

※ 発生程度は平年（過去10年間の平均値）・前年と比較し多～少の5段階で示している。



Ⅲ 8月の主要な病害虫の防除対策と留意点

水稻

1) 共通事項

- ・各種トラップによるトビイロウンカとコブノメイガの誘殺状況や防除適期に関する情報を病害虫防除所ホームページの「水稻海外飛来性害虫情報」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/0131112.html>)、葉いもち感染好適日の判定結果(BLASTAM)や予察灯による斑点米カメムシ類の誘殺状況を「調査データ」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/0201915.html>)に掲載し、毎週更新するので、これを参考にほ場を見回り、早期発見、適期防除に努める。

2) 病害

- ・穂いもちは発生後の防除が困難であるため、ほ場を観察し、伝染源となる上位3葉に葉いもちの病斑が見られる場合は速やかに薬剤による防除を行う。防除は、穂ばらみ後期～穂揃い期に行い、その後降雨が続く場合は、穂揃い期の7～10日後に追加防除を行う。
- ・紋枯病は高温・多湿の気象条件及び多肥や密植で発病が多くなる。特に、出穂期以降に高温が続くと進展しやすい。防除は、穂ばらみ期から出穂期にかけて薬剤散布を行い、その後も発生が拡大するようであれば2回目の散布を行う。防除の目安となる要防除水準は、穂ばらみ期の発病株率が20%である。なお、粒剤施用は出穂20日前頃に行う。

3) 虫害

- ・斑点米カメムシ類は水田畦畔雑草から侵入するが、出穂後の除草は本田への飛来を助長するので行わない。薬剤による防除は、アカスジカスミカメ等小型のカメムシが優占種の場合は穂揃い期に1回目を行うが、ホソハリカメムシやクモヘリカメムシ、ミナミアオカメムシ等が優占するほ場では、穂揃い期の3～7日後に1回目、2回目は1回目の7日後に行う。その後生存虫や新たな侵入が認められる場合は追加防除を検討する。
- ・トビイロウンカは、病害虫防除所ホームページ「水稻海外飛来性害虫情報」に掲載している防除適期を参考に防除する。トビイロウンカは水稻の株元に生息しているので、液剤で防除する場合は株元に達するように散布する。
- ・コブノメイガは、水田における発生状況を確認し、次の世代(第2世代)の幼虫を対象とした防除を行う。防除適期は粒剤を使用する場合は発蛾最盛期(成虫羽化期)、粉剤・液剤は若齢幼虫期(発蛾最盛期から1週間後)である。病害虫防除所ホームページ「水稻海外飛来性害虫情報」に掲載している防除適期を参考に防除する。

大豆

1) 共通事項

- ・病害虫防除所ホームページの「調査データ」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>)に掲載している各種トラップによる吸実性カメムシ類とハスモンヨトウの誘殺状況を参考に早期発見、早期防除に努める。
- ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

2) 虫害

- ・ハスモンヨトウに対しては、老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するため、若齢幼虫の被害により白色化した被害葉(白変葉)が認められたら防除を行う。
- ・吸実性カメムシ類に対しては、開花終期から子実肥大期において、7～10日おきに2～3回の薬剤防除を行う。また、ミナミアオカメムシ、アオクサカメムシに対するピレスロイド系薬剤(IRACコード:3A)の効果は劣るので、ほ場での発生種を確認して薬剤を選択する。

茶

1) 共通事項

- ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、主な対象に合わせた薬剤の選定及び系統の異なる薬剤のローテーション使用に努める。薬液が葉裏まで十分に届くよう規定量を丁寧に散布する。
- ・三番茶を収穫しない園では、今後の収穫計画に合わせた深刈り・浅刈り等の管理により、病害の伝染源・害虫の発生源の除去に努める。

2) 病害

- ・炭疽病の発生が見られる場合は、三番茶萌芽期から開葉期に遅れないよう薬剤を散布する。

3) 虫害

- ・チャノキイロアザミウマ及びクワシロカイガラムシの有効積算温度シミュレーションによる各地の防除適期や、ハマキムシ類のフェロモントラップによる誘殺消長を病虫害防除所ホームページの「調査データ」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>)に掲載するので、これを参考に適期防除に努める。
- ・チャノキイロアザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノホソガは、新芽や若い葉を加害するので、開葉期に防除する。複数の害虫を同時防除する際は、チャノキイロアザミウマを中心に散布のタイミングを図る。
- ・カンザワハダニは、多発してからの防除では十分な効果が得られないので、園地をよく観察し、低密度時から薬剤防除を行う。
- ・チャノコカクモンハマキは、新葉・旧葉の区別なく発生するので、発蛾最盛期の7～10日後（若齢幼虫期）に薬剤散布する。

果樹

1) 共通事項

- ・各種トラップにおける果樹カメムシ類の誘殺状況及びチャノキイロアザミウマ、ナシヒメシンクイ、ナシマルカイガラムシの積算温度による発生予測を病虫害防除所ホームページの「調査データ」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>)に掲載し、随時更新するので、これを参考に園地を見回り、早期発見、早期防除に努める。
- ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、主な対象に合わせた薬剤の選定及び系統の異なる薬剤のローテーション使用に努める。

2) 病害

- ・かんきつでは、黒点病の保菌率が高い5～10mmの枯枝はせん除する。せん除後もそれらの枝は伝染源になるので、園外に処分する。薬剤散布は、前回の散布から累積降水量が200mm～250mmを越えた時期、または25日～30日経過した時期を目安にする。かいよう病に弱い品種では、台風接近時など強い風雨が予想される前に予防散布を行う。

3) 虫害

- ・平年より気温が高く推移しているため、害虫の発生も平年より早めに発生する可能性が高いので、発生状況をよく観察し、適期の防除に努める。
- ・ハダニ類が多発する前に殺ダニ剤による防除を行う。かんきつでは、ミカンハダニ雌成虫の寄生葉率が30～40%または寄生頭数が10葉当たり5～10頭に達したら薬剤防除を行う。ナシのハダニ類では、雌成虫の寄生葉率が20%以上または1葉当たり1～2頭に達したら薬剤防除を行う。
- ・ナシヒメシンクイは、なし果実の成熟に伴い侵入量が急速に増加するため、成虫の発生盛期～10日後頃を中心に薬剤防除を行う。交信攪乱剤の成分であるフェロモンは空気より重く、傾斜地では下に流れるため、ほ場の高い位置では設置本数を多くする。
- ・果樹カメムシ類は、局地的に飛来し、被害をもたらすことがあるので、定期的に園を見回り、早期発見と薬剤による初期防除を徹底する。

1) 共通事項

- ・チョウ目害虫の発生状況については、病虫害防除所ホームページの「調査データ」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>)に掲載するフェロモントラップへの誘殺状況を参考にする。
- ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。
- ・株が大きくなり葉が繁茂すると、葉裏に薬剤が付着しづらいため、薬剤が葉裏にも十分かかるよう注意しながら散布する。
- ・太陽熱を利用した土壌消毒を行う場合は小畝を立てて土壌を湿らせ、土壌表面をビニルで被覆してハウス全体を20～30日間密閉する。処理期間中は土壌温度が40℃を超えていることを温度計で確認する。土壌温度や処理期間が足りない場合は土壌燻蒸剤による土壌消毒を検討する。

2) 病害

- ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める。
- ・ウイルスに対しては、発病株が二次伝染源となるので、見つけ次第抜き取り、直ちに処分する。トマト・メロンでは、ウイルス病抵抗性品種であってもウイルスに感染する。また、他のウイルス病にも罹病するので、媒介する微小害虫の防除を継続して行う。
- ・いちごでは炭疽病菌のまん延を防ぐため、必ず親株ほ、育苗ほの雨よけを行う。頭上かん水は避け、株元へ手かん水を行う。発病株は早期にほ場外に持ち出し、ビニル袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。
- ・いちごでは地震により苗が転倒・損傷した場合、県ホームページの「地震に伴うイチゴ苗の転倒・損傷等への技術対策について」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/74/274894.html>)を参考にする。

3) 虫害

- ・ほ場周辺および内部の雑草は、微小害虫の生息・増殖場所となるので定期的に除草する。
- ・いちごでは、殺ダニ剤を散布する際は、令和7年5月1日付け発生予察技術情報第1号(<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/279436.pdf>)を参考にして選定する。
- ・トマトでは、ほ場をよく見回り、トマトキバガによる被害の早期発見に努める。被害葉や被害果実は速やかに除去し、ほ場外に持ち出して適切に処分する。本虫に登録のある薬剤防除を行い、ハウス内の密度を抑制する。対策の詳細や薬剤の選定については、令和8年4月1日付け農業革新支援センター情報「トマトキバガに対する防除対策について」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/74/240009.html>)を参考にする。

地震被災地における留意事項（大切なお知らせ）

本情報は平常時における一般的な対策を提示するものです。

農地への移動や作業にあたっては安全確保を最優先し、日中を避けるなど、できる限り体調管理に努めてください。

令和8年熊本地震に伴う災害に係る農業者向け営農相談窓口の設置について

(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/74/274911.html>)

F A X 版はここまで

発生予想の根拠等を含む詳細については、ホームページ掲載の電子版をご利用ください。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

IV 主要な病害虫の予想発生量（平年比）と根拠

- ※ 根拠各項に記した先頭の「○」は重視した根拠、「◎」は特に重視した根拠であることを示す。
- ※ 根拠末尾の（＋）は発生を助長する要因、（－）は発生を抑制する要因、（±）は影響が少ない要因であることを示す。

九州北部地方の向こう1か月（8月1日～8月31日）の気象予報 福岡管区気象台発表

要素	低い・少ない	平年並	高い・多い
気温	10%	20%	70%
降水量	40%	40%	20%
日照時間	20%	40%	40%

水稲

1) いもち病（穂いもち）

（1）予想発生量 早植え：平年並

（2）根拠

- ◎ 7月の定点調査（早植え10か所）では、葉いもちの発生株率11.2%（平年11.1%）と平年並の発生であった（±）。
- ◎ 防除員報告（4地域）によると、7月の葉いもちの発生は平年並～やや少であった（±）。
- 向こう1か月の気温は高い見込みである（－）。

2) いもち病（葉いもち）

（1）予想発生量 普通期：平年並

（2）根拠

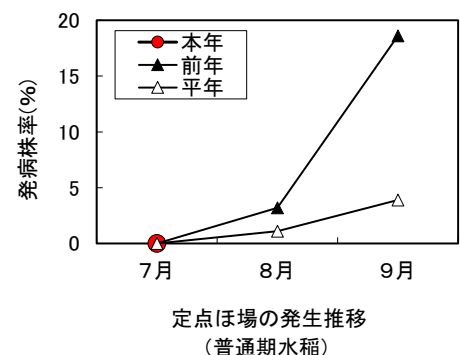
- ◎ 7月の定点調査（普通期20か所）では、発病株率1.0%（平年0.2%）と平年並の発生であった（±）。
- ◎ 防除員報告（8地域）によると、7月の発生は平年並～少であった（±）。
- 向こう1か月の気温は高い見込みである（－）。

3) 紋枯病

（1）予想発生量 早植え・普通期：やや多

（2）根拠

- 7月の定点調査（早植え10か所、普通期20か所）では発生を認めず（平年発病株率早植え0.4%、普通期0.0%）、平年並の発生であった（±）。
- 防除員報告（早植え4地域、普通期8地域）によると、7月の発生は平年並～少であった（±）。
- ◎ 向こう1か月の気温は高く（＋）、降水量は平年並か少ない見込みである（－）。



4) トビイロウンカ

(1) 予想発生量 早植え・普通期：平年並

(2) 根拠

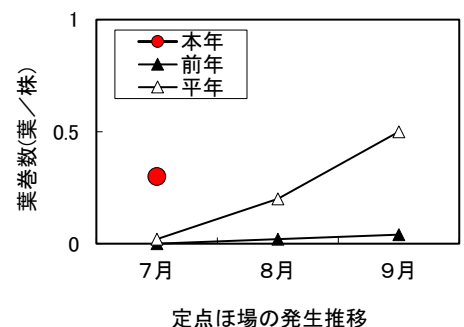
- ◎ 7月の定点調査（早植え10か所、普通期20か所）では、早植えが0.02頭/株（平年0.14頭/株）、普通期が0.00頭/株（平年0.00頭/株）と平年並の発生であった（±）。
- ◎ 合志市（生産環境研究所）の予察灯による7月第1半旬～7月第5半旬の誘殺数は121頭（平年114頭）と平年並の発生であった（±）。
- 防除員報告（早植え4地域、普通期8地域）によると、7月の発生は平年並～やや少であった（±）。
- 向こう1か月の気温は平年より高い見込みである（+）。

5) コブノメイガ

(1) 予想発生量 早植え・普通期：やや多

(2) 根拠

- ◎ 7月の定点調査（早植え10か所、普通期20か所）では、株あたりの葉巻数が早植え0.3葉/株（平年0.1葉/株）、普通期0.3葉/株（平年0.0葉/株）と平年比やや多の発生であった（+）。
- 合志市（生産環境研究所）のフェロモントラップによる7月第1～5半旬の誘殺数は11頭（平年46頭）と平年比やや少の発生であった（-）。
- ◎ 防除員報告（早植え4地域、普通期8地域）によると、7月の発生は平年比やや多～並であった（±）。
- ◎ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みである（+）。



6) 斑点米カメムシ類

(1) 予想発生量 早植え・普通期：平年並

(2) 根拠

- ◎ 合志市（生産環境研究所）で優占種であるアカスジカスミカメの予察灯による7月第1～5半旬の誘殺数は、201頭（平年211頭）と平年並であった（±）。
- ◎ 防除員報告（早植え4地域、普通期8地域）によると、7月の発生は平年並～やや少であった（±）。
- 向こう1か月の気温は平年より高い見込みである（+）。

大豆

1) ハスモンヨトウ

(1) 予想発生量 平年並

(2) 根拠

- ◎ フェロモントラップによる6月第5半旬～7月中旬（8月発生の前世代成虫）の誘殺数は、八代市で平年並、阿蘇市で平年比やや少、山都町で平年比やや少、合志市で平年比少であった（-）。
- 防除員報告（3地域）によると、7月の発生は平年並であった（±）。
- ◎ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みである（+）。

茶

1) 炭疽病

(1) 予想発生量 平年並

(2) 根拠

- 7月の定点調査（8か所）では、発病葉 6.4 葉／m²（平年 9.3 葉／m²）と平年比やや少の発生であった（－）。
- ◎ 防除員報告（5地域）によると、7月の発生は平年並～やや少であった（±）。
- 向こう1か月の降水量は平年並か少ない見込みである（－）。

2) カンザワハダニ

(1) 予想発生量 平年並

(2) 根拠

- ◎ 7月の定点調査（8か所）では、寄生葉率 1.5%（平年 1.2%）と平年並の発生であった（±）。
- 御船町（茶業研究所）の7月第5半旬の調査では、発生が認められず（平年寄生葉率 1.8%）、平年比やや少の発生であった（－）。
- ◎ 防除員報告（5地域）によると、7月の発生は平年比やや多～やや少であった（±）。
- 向こう1か月の気温は平年より高く、降水量は平年並か少ない見込みである（＋）。

3) チャノキイロアザミウマ

(1) 予想発生量 平年並

(2) 根拠

- 7月の定点調査（8か所）では、寄生葉率 7.8%（平年 1.8%）平年比多の発生であった（＋）。
- 合志市（生産環境研究所）の粘着トラップ調査では、7月第1～5半旬の捕獲頭数が 31 頭（平年 97.5 頭）と平年比やや少の発生であった（－）。
- 御船町（茶業研究所）のたたき落とし調査では、7月第1～4半旬の捕獲頭数が 61 頭／10 か所（平年 100.0 頭／10 か所）と平年比やや少の発生であった（－）。
- ◎ 防除員報告（5地域）によると、7月の発生は平年並であった（±）。
- 向こう1か月の気温は平年より高く、降水量は平年並か少ない見込みである（＋）。

4) チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予想発生量 平年並

(2) 根拠

- 7月の定点調査（8か所）では、寄生葉率 13.5%（平年 1.6%）平年比やや多の発生であった（＋）。
- ◎ 御船町（茶業研究所）のたたき落とし調査では、6月第5半旬～7月第4半旬の捕獲頭数が 97 頭／10 か所（平年 121.8 頭／10 か所）と平年並の発生であった（±）。
- ◎ 防除員報告（5地域）によると、7月の発生は平年並～やや少であった（±）。
- 向こう1月の気温は平年より高い見込みである（＋）。

5) チャノホソガ

(1) 予想発生量 平年並

(2) 根拠

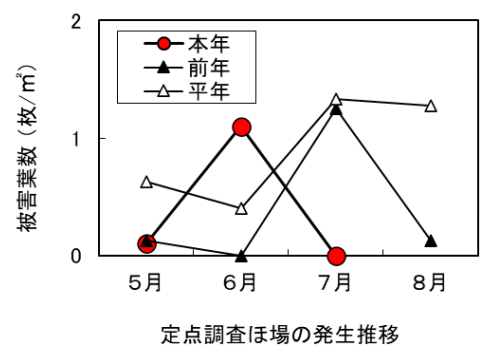
- 7月の定点調査（8か所）では、寄生葉率2.1%（平年1.0%）平年比やや多の発生であった（+）。
- 合志市（生産環境研究所）のフェロモントラップ調査では、7月第1～5半旬の捕獲頭数が33頭（平年320.7頭）と平年比少の発生であった（－）。
- 御船町（茶業研究所）のフェロモントラップ調査では、7月第1～4半旬の捕獲頭数が146頭（平年529.0頭）と平年比少の発生であった（－）。
- ◎ 防除員報告（5地域）によると、7月の発生は平年並～やや少であった（±）。
- 向こう1か月の気温は平年より高い見込みである（+）。

6) チャノコカクモンハマキ

(1) 予想発生量 平年比やや少

(2) 根拠

- ◎ 7月の定点調査（8か所）では、発生が認められず（平年被害葉数1.3枚/m²）、平年比やや少の発生であった（－）。
- 合志市（生産環境研究所）のフェロモントラップ調査では、7月第1～5半旬の捕獲頭数が77頭（平年213.4頭）と平年比やや少の発生であった（－）。
- 御船町（茶業研究所）のフェロモントラップ調査では、7月第1～4半旬の捕獲頭数が17頭（平年26.0頭）と平年並の発生であった（±）。
- ◎ 防除員報告（5地域）によると、7月の発生は平年並であった（±）。
- 向こう1月の気温は平年より高い見込みである（+）。



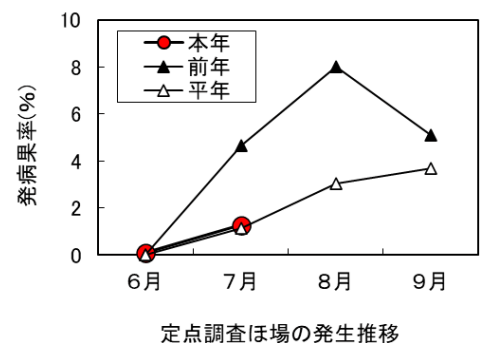
かんきつ

1) 黒点病

(1) 予想発生量 やや少

(2) 根拠

- 7月の定点調査（22か所）では、発病果率1.3%（平年1.1%）と平年並の発生であった（±）。
- 防除員報告（7地域）によると、7月の発生は平年比やや多～やや少であった（±）。
- ◎ 向こう1か月の降水量は平年並か少ない見込みである（－）。



2) かいよう病

(1) 予想発生量 平年並

(2) 根拠

- 7月の定点調査（22か所）では、発病葉率2.6%（平年1.7%）と平年並の発生であった（+）。
- ◎ 防除員報告（7地域）によると、7月の発生は平年並であった（±）。
- 向こう1か月の降水量は平年並か少ない見込みである（－）。

3) ミカンハダニ

(1) 予想発生量 平年並

(2) 根拠

- 7月の定点調査(22か所)では、雌成虫の寄生葉率2.4%(平年7.2%)、寄生頭数0.4頭/10葉(平年3.7頭/10葉)と平年比やや少の発生であった(ー)。
- ◎ 防除員報告(7地域)によると、7月の発生は平年比やや多～並であった(±)。
- 向こう1か月の気温は平年より高く、降水量は平年並か少ない見込みである(+)

4) チャノキイロアザミウマ

(1) 予想発生量 平年並

(2) 根拠

- ◎ 7月の定点調査(22か所)では、被害果率0.1%(平年0.3%)と平年並の発生であった(±)。
- ◎ 防除員報告(7地域)によると、7月の発生は平年比やや多～並であった(±)。
- 向こう1か月の気温は平年より高く、降水量は平年並か少ない見込みである(+)

なし

1) ハダニ類

(1) 予想発生量 平年並

(2) 根拠

- ◎ 7月の定点調査(6か所)では、寄生葉率7.7%(平年5.3%)と平年並の発生であった(±)。
- 防除員報告(2地域)によると、7月の発生は平年比やや多～並であった(+)
- 向こう1か月の気温は平年より高く、降水量は平年並か少ない見込みである(+)

2) ナシヒメシンクイ

(1) 予想発生量 平年比やや多

(2) 根拠

- 宇城市のフェロモントラップ調査では、7月第1半旬～第6半旬の総誘殺数35頭(平年51.7頭)と平年比やや少の発生であった(ー)。
- ◎ 防除員報告(2地域)によると、7月の発生は平年比やや多～並であった(+)。
- 向こう1月の気温は平年より高い見込みである(+)

果樹全般

1) 果樹カメムシ類

(1) 予想発生量 平年比多

(2) 根拠

- ◎ 7月第1～5半旬までの予察灯によるチャバネアオカメムシ及びツヤアオカメムシの誘殺数は、合志市と宇城市で平年比多、天草市で平年比やや少であった(+)。
- ◎ 7月下旬のヒノキ球果寄生密度(6か所)は、8.7頭/5枝(平年4.5頭/5枝)と平年比多の発生であった(+)。
- ◎ 7月下旬のヒノキ球果上の口針鞘数(6か所)は、10.5本/果(平年4.5本/果)と平年比多であった。新世代成虫が山林から離脱し果樹園地に飛来する時期は、8月下旬以降となる年が多いが、今年は飛来時期が大幅に早まると予想される(+)。
- 防除員報告(12地域)によると、7月の発生は平年比やや多～並であった(±)。
- 向こう1月の気温は平年より高い見込みである(+)。

果樹カメムシ類の誘殺状況(7月※)

市町村名	チャバネアオカメムシ			ツヤアオカメムシ		
	本年(頭)	平年(頭)	平年比(%)	本年(頭)	平年(頭)	平年比(%)
合志市	495	97	510	363	36	1008
宇城市	4322	1313	329	2460	609	404
天草市	2916	8996	32	1315	865	152

※ 合志市:7月第1半旬～第3半旬、第5半旬の総数(7月第4半旬は欠測)

宇城市:7月第1半旬～第4半旬の総数

天草市:7月第1半旬～第5半旬の総数

予測される各地の離脱開始日

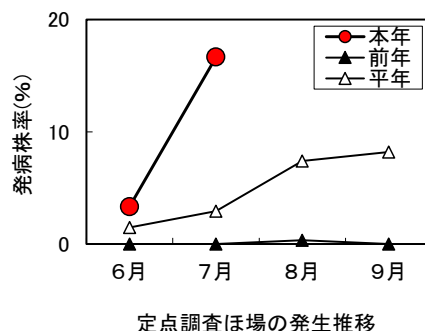
調査地点	熊本市 (河内)	宇城市 (松橋)	宇城市 (三角)	合志市 (栄)	天草市 (有明)	天草市 (本渡)
離脱開始予測日	8月8日	7月27日	8月19日	7月27日	9月2日	8月21日

1) 灰色かび病

(1) 予想発生量 夏秋作：平年比やや多

(2) 根拠

- ◎ 7月の定点調査（6か所）では、茎葉での発病株率16.7%（平年2.9%）、果実での発病株率1.0%（平年0.0%）と平年比多の発生であった（+）。
- ◎ 防除員報告（2地域）によると、7月の発生は平年比多～並であった（+）。
- ◎ 向こう1か月の降水量は平年並か少ない見込みである（-）。



2) 葉かび病

(1) 予想発生量 夏秋作：平年並

(2) 根拠

- ◎ 7月の定点調査（6か所）では、発病株率4.7%（平年6.6%）、平年並の発生であった（±）。
- ◎ 防除員報告（2地域）によると、7月の発生は平年並であった（±）。
- 向こう1か月の気温は平年より高く（-）、降水量は平年並か少ない（-）見込みである。

3) すすかび病

(1) 予想発生量 夏秋作：平年並

(2) 根拠

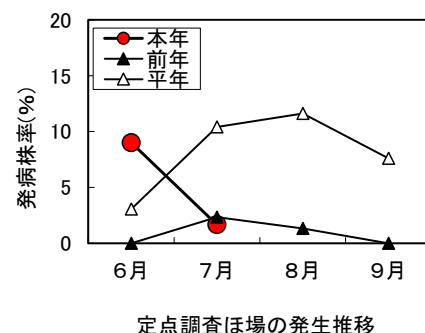
- 7月の定点調査（6か所）では、発病株は確認されず（平年4.3%）と平年比やや少の発生であった（-）。
- ◎ 防除員報告（2地域）によると、7月の発生は平年並であった（±）。
- 向こう1か月の気温は平年より高く（+）、降水量は平年並か少ない（-）見込みである。

4) うどんこ病

(1) 予想発生量 夏秋作：平年比やや少

(2) 根拠

- ◎ 7月の定点調査（6か所）では、発病株率1.7%（平年10.4%）と平年比少の発生であった（-）。
- ◎ 防除員報告（2地域）によると、7月の発生は平年並であった（±）。
- ◎ 向こう1か月の降水量は平年並か少ない見込みである（-）。



いちご

1) 炭疽病

(1) 予想発生量 育苗ほ：平年並

(2) 根拠

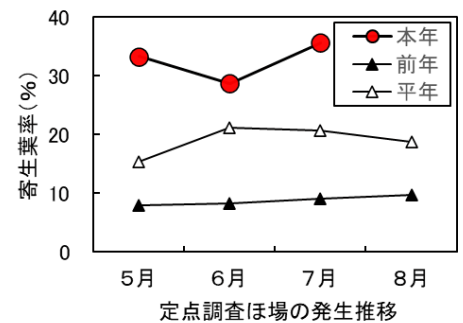
- ◎ 7月の定点調査（6か所）では、発病株は確認されず（平年0.1%）、平年並の発生であった（±）。
- ◎ 防除員報告（3地域）によると、7月の発生は平年並であった（±）。
- 向こう1か月の降水量は平年並か少ない見込みである（－）。

2) ハダニ類

(1) 予想発生量 育苗ほ：平年比やや多

(2) 根拠

- ◎ 7月の定点調査（6か所）では、寄生葉率35.7%（平年20.7%）と平年比やや多の発生であった（+）。
- 防除員報告（3地域）によると、7月の発生は平年比やや多～並であった（±）。
- ◎ 向こう1か月の気温は高い見込みである（+）。



3) アブラムシ類

(1) 予想発生量 育苗ほ：平年並

(2) 根拠

- ◎ 7月の定点調査（6か所）では、寄生葉率9.3%（平年6.3%）と平年並の発生であった（±）。
- ◎ 防除員報告（3地域）によると、7月の発生は平年並であった（±）。
- 向こう1か月の気温は高い見込みである（+）。

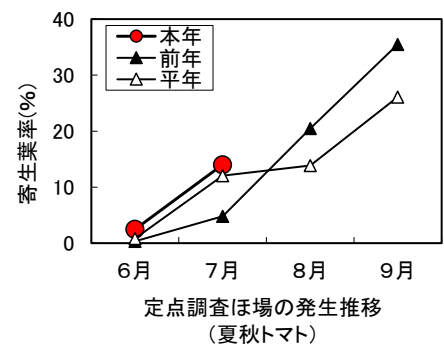
果菜類（高冷地夏秋作）

1) コナジラミ類

(1) 予想発生量 平年比やや多

(2) 根拠

- 7月の夏秋トマトの定点調査（6か所）では寄生葉率14.0%（平年12.1%）と平年並の発生であった（±）。
- 防除員報告（3地域）によると、7月の発生は平年比やや多～並であった（±）。
- ◎ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みである（+）。



果菜類（平坦地夏秋作）

1) コナジラミ類

(1) 予想発生量 平年比やや多

(2) 根拠

○ 防除員報告（3地域）によると、7月の発生は平年並であった（±）。

◎ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みである（+）。

2) アザミウマ類（いちご除く）

(1) 予想発生量 平年比やや多

(2) 根拠

○ 防除員報告（3地域）によると、7月の発生は平年比やや多～並であった（±）。

◎ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みである（+）。

野菜類全般

1) オオタバコガ

(1) 予想発生量 平年並

(2) 根拠

◎ 7月の夏秋トマトの定点調査では寄生株は確認されず（平年0.0%）、平年並の発生であった（±）。

○ フェロモントラップによる6月第5半旬～7月中旬（8月発生の前世代成虫）の誘殺数は、八代市で平年並、阿蘇市で平年比やや少、山都町で平年比やや少、合志市で平年比少であった（-）。

◎ 防除員報告（7地域）によると、7月の発生は平年並であった（±）。

○ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みである（+）。

V 農薬安全使用

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう飛散防止を徹底し、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

VI その他

本情報は病虫害防除所のホームページにも掲載しています。

病虫害発生予察情報に関する詳細な内容等については、病虫害防除所（農業研究センター生産環境研究所内、電話096-248-6490）にお問合せください。

ホームページを
チェックだモン！



©2010 熊本県くまモン